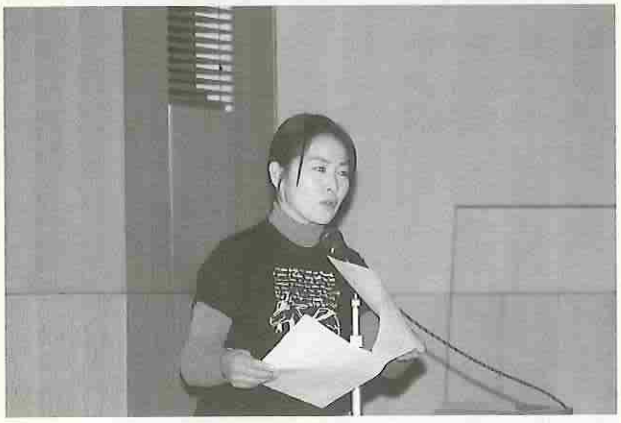
第８回研究大会

口頭発表「つながれ命の学び，動物飼育体験教育」

池上久子*　早川たけ子*　早川哲二郎**　金子壽美子**　澁谷世津子**



１　学校紹介

「ジョナサンおはよう」「ユキ，ココ，元気？」

動物達にやさしく声をかけながら，世話をする子どもたちの姿から大戸小の１日が始まります．

本校は，東京都町田市の西の端に位置し，山に囲まれた自然豊かな地域です．児童数は174名，各学年１クラスという小規模校です．

大戸小の中庭に「ふれあい広場」が作られたのは４年前のことです．

かつて，校舎の隅っこで地味に生きていた動物達が，今はどこからでも見ることができる20メートル四方の「ふれあい広場」に放し飼いにされ，のんびり草をはんだり虫をついばんだりしています．休み時間には抱っこしたり掃除をしたりする子ども達でにぎわい，時には近隣の幼稚園や保育園児達にもかわいがられています．　今日は，このように，子どもと動物が触れあえる活動に変えてきた経緯と共に，地域の方々の支援について報告させていただきます．

２　全校がかかわる飼育活動への移行

(1)きっかけ

「学校で飼っている動物でありながら，かかわっているのは飼育委員会の児童だけ．」

という現状に疑問を感じていた飼育担当の私は，研修会で，担当の獣医師より

「学校で動物を飼う意義は，子どもに命の大切さを学ばせる役割がある．そのためには，動物と直接触れ合う機会を作ってあげることだ．」

という話を聞き衝撃を受けました．「ここに答があった．」と，その場で『ふれあい』中心の飼育にしていこうと強く決意しました．（この獣医師こそ，本大会事務局長の中川先生です．）

当時の校長に相談すると，「いいことだね，飼育委員会として進めてみてください．」と快諾を得ることができ，さっそく検討していきました．

(2)適正な動物の数に

まずは，多すぎる動物を畜産大学の協力を得て，少なくしました．すると小屋はとてもすっきりとし，掃除やエサやりがしやすくなりました．

現在学校には，ヤギが２頭，ウサギ３羽，チャボ・ウコッケイが３羽ずついます．

新飼育舎

(3)動物に名前をつける．

１匹ずつ見分けられるようになり，子供たちと名前をつけました．不思議なもので名前がついたとたん，更に親しみがわいて

きました.

(4)飼育活動の改革

そして，私たちが「ふれあい活動」といっている飼育の方法を大きく変えました.

本校の大半の児童は，動物を飼いたくても飼えないという制約のある都営団地から通っています.『だからこそ学校で飼う意義は大きい．大戸の子どもたちにこそ動物の温かさや優しさを実感してもらいたい.』と思い

①１年生も含め，全学年で世話をする.

②時間は中休みの20分間

③飼育委員会の児童は補助として入る.

という体制を考えました.

3　ふれあい活動と児童の変化

(1)ふれあい活動スタート

このふれあい活動については，教職員の深い理解と協力が何よりの推進力になりました．また，動物を可愛がるということは抱くだけではなく気持ちよく過ごせるように世話をすることだ，という考えにも賛同してもらい，４年前の９月半ば，全校児童による飼育活動が始まりました.

(2)子どもの変化

この活動が始まって一番喜んだのはやはり子ども達でした．それまで，抱きたくても抱けなかった子，こわくて近寄れなかった子達がどんどん動物と仲良くなっていきました．ある子どもは，作文に

「人間と動物は心と心で通じ合う事ができるんだと思います．私は，動物が好きというだけじゃなくて『早く動物の所に行ってあげたい』と思うようになりました.」

と書いていました．早くも子どもたちの心が変わってきている，と手ごたえを感じました．このような活動が評価され，東京都の「学校動物飼育モデル校」として連続４年目になります.

(3)クラス経営に生かされたふれあい活動

さて，昨年度　私は，授業中大声で叫んだり，突然喧嘩が始まったりと手のつけられないような状態になってしまった４年生を担任することになりました．私は心の成長を願い，特に“本の，読み聞かせ”と“週１回のふれあい活動”に力を入れ指導していきました．しかし，当初は当番を忘れて，さっさと遊びに行ってしまったり，いやいややっている姿も見られました．私は一緒に世話をしながら，動物に関するエピソードや生態について語り，病気やけがなども，そのまま見せていくことにも心がけました.

「今日もいいウンチをしているね．動物は何も言わないから，ウンチで元気かどうかみるんだよ.」

「へーえウンチって大事なんだあ.」

「では，ヤギのバニラは一日なん粒くらいウンチをするでしょうか？」

「50？　70？　ん～100？」

「残念でした！　答えは2000粒です！」

「ぎゃー」

実は何日か前に　実際に数えておいたのです.（ヤギは1回に100粒前後のウンチをします.）

こんな会話を繰り返すうちに，次第に動物に関心を持つようになり仕事をサボる子もなくなってきました．そんな姿を見て，多少の心配はありましたが，以前からやってみたいと言っていたヤギの散歩に挑戦してみることにしました.

早速，リードを付けて連れ出しました．ところが犬のようなわけにはいきません．びくとも動こうとしないのです．子どもたちは，エサでつろうと草を取りに走り，ちらつかせながら，ようやく門にたどり着きました．すると今度はポロポロとウンチです．おおあわてで，ほうきやチリトリを取りに走る子，「暑いから水も持って行こうよ」とバケツを取りに行く子．次々に進んで行動する姿に，子どもたちは確かに変わり始めていると感じ，さっきまでの不安な気持ちが吹き飛んでいました．その日から子どもたちとヤギとの距離が急速に縮まっていきました.

そんなある日の授業中，「先生，雨だよ，ヤギたち，大丈夫かな.」と数人の男の子がさけびました．以前“ヤギは，雨が大嫌いなんだよ”と話したことがあったのですが，それを覚えていて，心配してくれたその気持ちがとてもうれしく「気がついてくれてありがとう.」と，みんなでふれあい広場に飛び出していきました.

＜Ａ先生の実践＞

昨年，赴任されてきたＡ先生はあまり動物が好きではありませんでした.赴任当初，「ふれあい活動」が主体となっていることに，身を引く思いだったそうです．しかし，担任した子ども達の変化を見て動物飼育による教育的な効果を実感されたと言いま

す．

それは，人間関係がうまく作れない子どもほど，動物たちに思い切り優しい笑顔を見せ上手にチャボを抱いたり，雨の日も率先して小屋の掃除をしたり，という姿が見られたというのです．A先生，現在は飼育委員会の担当者の1人として毎日，飼育小屋に足を運んでくださっています．

4　地域の方々の協力

(1)新飼育舎建設

山間部に近い本校の冬の寒さは大変厳しいです．以前の飼育舎は日当たりが悪く，「ふれあい広場」とも離れていました．そこで，「ふれあい広場」の中に飼育舎をつくることにしました．

この話を聞いた山を持つ地域の方が「木ならいくらでもある，必要なだけ切ってもっていきな．」と大型トラック２台分の木材を提供してくださいました．今度は子ども達が，その木の皮をはいだり，バケツリレーで砂や水を運んでセメントを作ったりして，難しいと思われたコンクリート張りにも挑戦．そして，一昨年２月，た何でも作ってしまう主事さんの指導のもと，すべて手作り，ログハウスの飼育小屋が完成しのです．

子どもたちは，「ここに住みた～い．」を連発．飼育活動は更に充実していきました．

(2)新飼育舎の工夫

実はこの飼育舎には，いくつかの工夫があります．紹介してみたいと思います．

①清潔で掃除がしやすいように床はコンクリートで，排水路があり，水を流せるようしています．

②鶏小屋には砂場を作り，砂遊びだけではなく，フンは篩にかけるだけで取れるようになっています

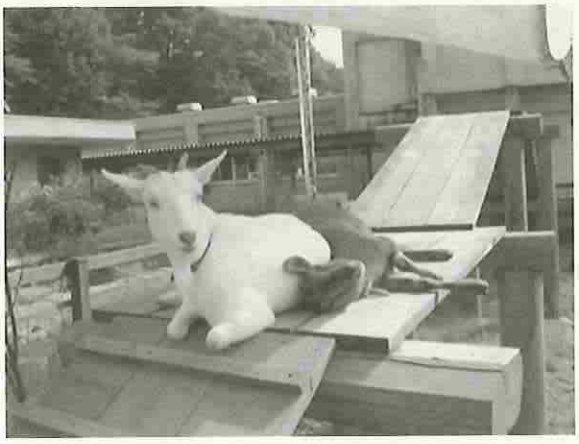
③すべての窓に取り外し可能なアクリル板をつけ，夏ははずして涼しく，冬は取り付けて暖かくしています．

④ドアも二重にして夏は内側の網の扉だけにして風通しをよくし，冬は，外側の扉も閉めます．更に下の部分に小さな穴を作り，動物たちの日中の出入りを自由にしています

⑤暑かったこの夏，威力を発揮したのはよしずでした．立てかけたよしずの陰に動物たちが集まり，体を伸ばしていました．

よしず

二重の扉



ヤギ橋

またキウイ棚を作ったり，小屋の屋根にカボチャの葉やゴーヤのツルなどを茂らせる試みもしました．

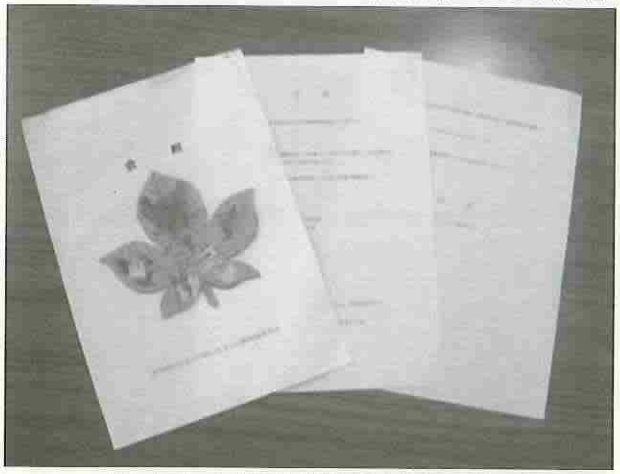
⑥昨年からは電気が使えるようになり，外灯と各部屋に蛍光灯がつきました．そして，夏は換気扇，冬はヒーターを取り付け，どちらもタイマーで必要な時間だけ作動させています．

⑦また，高いところが好きなヤギのためにヤギ橋も作りました．毎日この橋の上で日向ぼっこをしています．

※今，紹介したような工夫は，獣医師の指導のもと，飼育活動の試行錯誤の中でできた物です．これからも，色々な計画があります．ふれあい広場は，たえず変化していっています．

※さて，大戸小の飼育活動にとって欠かせないのは地域の方々の存在です．実はあのふれあい広場も飼育舎も地域の方々のご尽力で，できたものなのです．今日は，その代表の方に来て頂いていますのでお話をして頂きます．

(3)地域の支援「ふれあい活動推進委員会」



「ふれあい活動推進委員会」会則

保護者地域で立ち上げた「ふれあい活動推進委員会」の会長をしております，早川です．

一昨年の２月に大戸小で行われた「シンポジウム」で，学校飼育の一番の悩みが「休日の世話である．」と言う話を聞きました．そこに参加していた地域の方々より，次々に協力していこうではないかという前向きな意見が出され，さっそく翌月から「休日のお世話」を始めました．

また，３年前より，毎月，第２日曜日の午前10時から12時までの2時間を，「ふれあいの日」として，地域の方々に開放する活動もしています．そこでは，飼育小屋の掃除と，動物たちと自由にふれあっていただいています．回を重ねる毎に参加者も増え，中には，ホームページを見て，市内や神奈川県からも見学に来る先生方もいらっしゃいます．

そんな中，より組織的に運営していこう，という話が持ち上がり，昨年７月に，会則も設けながら「ふれあい活動推進委員会」として正式に発足いたしました．

「ふれあい活動を通して地域とのつながりを深め，子どもの豊かな情操教育に資する事」

を目的とし，具体的な活動としては，

・休日や年末年始の動物飼育
・第2日曜日の「ふれあいの日」の運営
・ふれあい広場の整備として，ヤギ橋作りや飼育舎建設の支援
・さらに，飼育活動費の援助として，ヒーターや換気扇，タイマーなどを購入し活用してもらっています．これらの資金は，地域のお祭りなどで上げた収益金をあてています．昨年は，先生方と協力して大戸小の動物たちをデザインした，このようなＴシャツやエコバッグなどを販売し大変好評でした．

なにより，一生懸命に飼育に関わっている子ども達の笑顔をみていると，私たちも何か応援したいという思いがしてきます．先生方も休みを返上して地域の行事に参加してくれたり，飼育に関する研修に行ってくださっています．また，何人もの獣医さんが支えてくださっています．ですから，私たち地域や保護者としても日曜日や休日ぐらいはお手伝いをしないと，と思うのです．それがまた，子ども達に返ってくるのではないかと思います．

これからも，学校と地域が協力して，よりよい飼育活動をしていきたいと考えています．

５　飼育活動を授業に生かす実践

ありがとうございました．このような力強い支援により私たちは安心して飼育活動ができています．

さて，ふれあい活動４年目の今年は，授業プログラムを考えています．

まず，６年生が１年生に「大戸の動物について教えよう」という授業をしました．

６年生から１年生へ

動物たちの特徴やエサの種類，ふれあい広場の成り立ちなどを，写真やビデオ．時には実物を見せたりして紹介．２時間目には，ふれあい広場で実際の動物の抱き方や世話の仕方を教えました．

６年生はさらに最高学年としての責任を自覚するようになり，１年生は，動物に興味を持ち，それまで，さわれなかった動物と上手にふれあうことが出来るようになる，という成果を生み出しました．

また，２年生が，幼稚園生へ，大戸の動物たちをクイズ形式で紹介する，という授業も行われました．これには，園児もノリノリで，楽しい中にも大戸の動物を理解する良い機会になりました．

幼稚園児とのふれあい

また，展覧会の作品などにも「ふれあい広場」の動物たちがたくさん登場しています．保護者アンケートには，「ふれあい活動を通して，子どもたちの心に動物たちへの愛情が自然と育っているように思われます．」という声が寄せられました．

授業の他にも，委員会や集会などにも，ヤギのユキやココが登場したり，６年生の卒業文集にも多く書かれるなど，子ども達の日常的な生活の一部になっており，　将来の夢は「獣医さん」という子も多くいます．

６　命の学び

一昨年夏，学校のシンボル的存在だったヤギのバニラが，突然倒れてしまいました．駆けつけてくれた獣医さんに，明日までは持たないだろうと言われました．教職員や地域の方々とで昼も夜も交代で飼育小屋に泊まり看病にあたりました．獣医さんから「こんな幸せなヤギ，世界中探したっていねえぞ」といわれたほどでした．ほとんど意識のない危篤状態が２日間続きましたが，点滴や注射などの治療が功を奏し，バニラは奇跡的に命をとりとめることができました．10歳を過ぎた老齢の体でしたが少しずつ回復に向かい，子どもたちはバニラの頭をなでながら「バニラ頑張れ」と声をかけたり，動けないバニラに草をとっては口に運んであげたりしていました．

「バニラが生きている」

それだけで，子ども達も私たち大人も，うれしくて仕方がありませんでした．

ところが，もうすぐ立てる，と思っていた９月半ば，バニラは突然息を引き取ってしまったのです．倒れてから１８日目のことでした．バニラの死は，かかわった誰もが深い悲しみを味わいました．しかし同時に，力のかぎり頑張って生きる姿を子どもたちにまざまざと見せてくれました．ある子どもは，「バニラはがんばった．一生懸命立とうと最後までがんばった．」　とつづり，さらに

「今まで友だちとけんかした時，思わず“死ね”なんて言っていたけど，死ぬってことがこんなに悲しいことだとは思わなかった．僕はこれから“死ね”なんて絶対言わない」

と書いていました．

お別れ会には，全校児童とともに，たくさんの保護者・地域の方々・そして卒業生が集い，バニラへの感謝の想いあふれる式になりました．

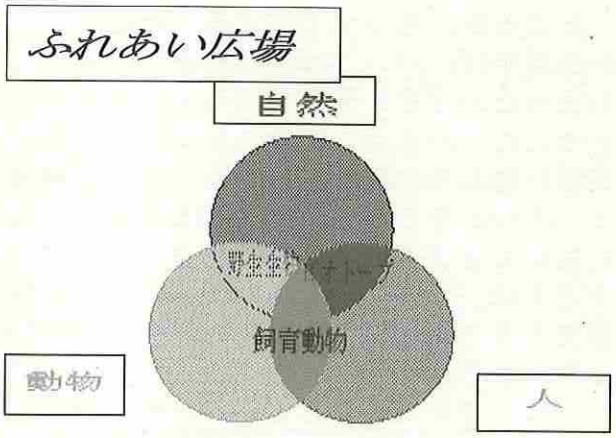
バニラとのお別れ

このような病気やケガ，死などは避けることができません．大戸小ではその時こそ，生きることや命の尊さを伝えるチャンスだととらえ，そのままの姿を見せています．

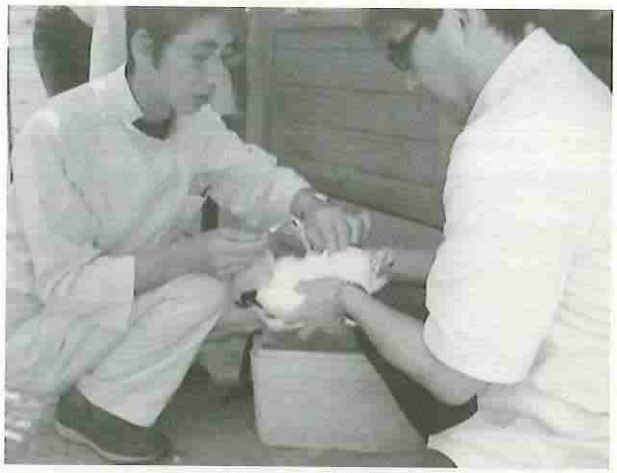
また，私たち教員も，動物の治療を通して心が一つになった経験をしてきました．

このような飼育活動をしっかり支えてくださっているのが，学校獣医の先生方です．日常的な獣医師との連携は欠かせません．少しの事でも，気軽に獣医さんに相談しています．そのような体制を整えてくださっている獣医師会，教育委員会の皆様にも感謝しています．

7　まとめ



最後に，「自然」と「人」と「動物」の３つの場から作られている大戸小の「ふれあい広場」について，まとめてみたいと思います．



獣医師さんの定期検診

①「人」と「自然」の関連では，広場に接し「ビオトープ」を作っています．日常的に子供たちが自然とふれあい，親しみ，好きになってもらうための場所，環境です．

②「動物」と「自然」の関連では「野生動物」が存在します．野生のサルに人が勝手にえさをあげる等の間違ったふれあい方があることを学校林や移動教室で子どもたちに教えています．

③「人」と「動物」との関連は「飼育動物」です．動物と親しみ好きになることはもちろんですが，私たち大戸小では，「環境学習」という視点から，飼育動物は野生動物から家畜化したこと，愛玩や癒しのほかに，食料，毛皮等様々な利用があることも教材化していかなければならないと考えています．人も動物です．きちんとした生命観，つまり動物は他の生命をいただくことで生きているという基本を人の文化誌のなかで伝えなければならないと思っているからです．

以上３つの関連ですべて重なった部分が「ふれあい」であると考えます．この「ふれあい」は生命とのふれあいであり，「共存」ということでもあります．

「自然」「人」「動物」の共存・共生を体験的に学習する場が「ふれあい広場」であり，「持続可能な社会」へつながることになると考えています．

(*大戸小学校環境教育研究会
**ふれあい活動推進委員会)